

大学教育の総合的改革

ーグローバル化時代の学部教育ー



講師:濱田 純一 氏(東京大学 総長)

東京大学は、秋入学をはじめとした学部教育のあり方を根本から捉え直す改革に着手している。大学改革は日本の社会に対する意識改革だと主張する濱田純一総長が、その取り組みと意義を語った。

「よりグローバルに、よりタフに」 秋季入学の意義

グローバル化や少子・高齢化を迎える中、若者をどう育てるかは重要な課題だ。われわれは、目指す学生像として「よりグローバルに、よりタフに」を掲げ、具体的な方策を協議している。

「グローバル」とは、語学や知識だけでなく、異なる価値観とのぶつかり合いを、知力や行動力、想像力の源泉として取り込んでいくことだ。

「タフ」とは、いかなる状況でも失敗を恐れず主体的に行動できる精神力とコミュニケーションを大事にする「しなやかな強^{きょうじん}さ」を意味する。

こうした学生を育成するためには何が必要か。その発想の起点としたのが秋入学の検討だった。秋入学の意義を四つ挙げたい。

一つは、国際的な学生の流動性が向上することだ。秋入学は海外の大学と学期がそろうので学生が海外に出やすくなり、国際経験をすることが増える。

二つ目は、国際標準化による教育の質の向上だ。秋入学は学期の調整だけでなく、教育の質が向上しなければ意味がない。主体的な学びの促進が重要で、授業の中身そのものを国際標準化することが求められる。

三つ目は、ギャップタームの活用だ。高校卒業後から9月入学までの半年間

を国際交流や社会体験に活用できる。

四つ目が、私たちの意識や社会のシステムにインパクトを与えることにより、グローバル化時代への対応を考えるきっかけにするということだ。

ただし、家計負担の増大と教育機会の均等をめぐる問題や現在の就職・資格試験の仕組みをいかに変えていくのかといった課題が残されている。

大学改革は 社会と連動して行うべき

こうした議論を踏まえ、教養学部では平成24(2012)年10月から、すべて英語で授業を行う秋入学プログラムをスタートさせた。この試みは日本の国際化を進めるために非常に大きな教訓をもたらしている。今後、優秀な学生を集めるため、世界中の高校に働き掛けることも大切だ。

秋入学への重要なステップが、現行の2学期制から4ターム(学期)制+S(サマースクール)への移行と教育内容・方法の改革だ。これまで海外の大学の単位を取ろうとすると、日本の大学で一年遅れることを覚悟しなければならなかった。4ターム制では、海外の大学の単位取得や、サマースクールへの参加がしやすくなり、他で集中的に学習できるというメリットがあり、海外の学生も日本に受け入れやすくなる。

ギャップタームの活用の意義は、先

端の研究や多様な社会体験を通じて、大学で学ぶ目的意識を明確化し、動機付けをすることだ。例えば、日本社会や文化についての資料を読み、論文を書き、かつ実社会を体験する、ボランティアや国際交流などの社会体験を積む、といった活動が想定される。

さらに偏差値重視の価値観をリセットする必要がある。トップを目指すことが人間の力を鍛える原点ではあると思うが、それがすべてではないし、トップに立った人間だけが偉いわけではない。世界に出れば、東大に現役で入ったことなど誰も評価しない。その人間自身が見られるのである。

これまで日本社会は、スピードの速さと効率性を重視してきた。その点でギャップタームは時間の無駄にも見える。しかし、これからの時代は、回り道もしないと、今までの成功体験だけにとらわれ、伸びしろをつくることができなのではないか。横道にそれながら肌感覚で知識を身に付ける教育を考えなければならない。平成28年度には推薦入試も導入する予定だ。点数による絶対的な公平感を崩すことを考える意味で、社会にインパクトを与えたい。

大学の使命は、社会と連動するためのきっかけをつくること。そして社会は若者を育てるという意識を強く持つことが必要だ。大学改革は大学と社会が連動して取り組むべき課題である。